

がんの教室

田中 伸哉

⑮

「抗がん剤」は広い意味でがんを制圧する薬の総称である。抗がん剤には、がんに効く化学物質、ホルモン薬、分子標的治療薬、がんワクチンなどが幅広く含まれるが、がんに効く化学物質のことを化学療法薬という。

化学療法薬の歴史は古く、第1次世界大戦でマスタードガスという毒ガス兵器が開発された。それを浴びた人は血球が減少することが知られており、1946年に初めて白血病の治療薬として使

化学療法とは

用された。

化学療法薬は、現在では白血病、脾がん、胃がん、大腸がん、乳がんをはじめ多くのがんで使われる。しかし、肝がん、腎がん、肉腫などには効きにくい。理由は未解明だが、これらのがん細胞は一度入ってきた薬をはき出してしまいうことが一因らしい。

化学療法薬は静脈への

点滴で全身にまわり、がん細胞の一つ一つに入り込み、細胞が分裂するのを止める。やがてがん細胞は死ぬ。暴走車のアクセルやエンジンを壊して止めるようなものだ。

細胞が増える事を止める化学療法薬は、体にとっては毒である。常時増えている髪の毛を作る細胞や腸の細胞も打撃するため、毛が抜けるし、下痢などの副作用も出る。表現はきつい「毒をもつて毒(がん)を制する」のだ。

現在では簡便な飲み薬もある。また、薬が患者に効くかどうか、患者の体質などを調べる検査で分かる場合もある。

10年前に、知人のピアニスト教師が子宮がんになった。発見が遅く、小さながんがおなかの中に多数

分裂止めるが副作用も

転移しており、手術不能であった。頼みの綱の化学療法を副作用に苦しみながら半年続けたところ、がんはすっかり消えて今も元気にレッスンをしている。治療は苦しいが、希望を捨てないでほしい。

(北大医学部腫瘍病理学教授)

